

田中瑞穂 (1962) 豊頃村大津の海岸草原群落をみて、No.129.釧路市立郷土博物館
 ———— (1963) 釧路の植物、釧路市
 ———— (1980) こどものための東北海道の植物、釧路市

谷口弘一共著 (1979) 北海道植物教材図鑑、北海道新聞社

辻井達一共著 (1991) 北海道の花、北海道大学図書刊行会

東京天文台編纂(1989)理科年表、丸善株式会社

続・浦幌口マンの会の竪穴住居復元

後藤秀彦

筆者は本誌前号において「浦幌口マンの会の竪穴住居復元」と題して、1991年度における同会の縄文時代中期の竪穴住居復元の顛末を報告した（後藤、1992）。そもそもこの古代住居復元事業は、1991年度を初年度として、1992年度には縄文時代早期1棟、統縄文時代1棟、1993年度には擦文時代2棟などを復元しようとするもので、2年目の本年度は計画に従い縄文早期及び統縄文の住居各1棟を復元した。住居は縄文早期が浦幌町平和遺跡の第8号住居跡、統縄文時代が常呂町栄浦2遺跡の第9号住居跡をモデルとしたが、細部については省略したり付加したり、縮小したりして、独自に設計した。例えば、縄文早期の住居については柱の配列の歪みを正すとともに、柱配列の延長上に出入口を配置するなどの補正を行い、統縄文時代のものについては主柱の数を減らし、規則正しい配列としたなどである。

以上のような準備の後、必要な資材の調達や日程の調整を行い、実際に野外作業が開始されたのが7月5日、今年度分の作業終了が8月24日である。作業終了日には本別町から沢井トメノさんをお招きして、ウバユリの粥や澱粉かきの調理指導を受けるとともに、陶芸サークル「土の会」では縄文土器や統縄文土器の複製品を野焼きし、終了後、焼肉で完成を祝いあった。この試みは、この会の今後の体験学習の基本となるものである。

竪穴住居造作の最大の問題点は湿気のようである。特に、日常的に居住せず、火を焚ない本例のような場合、恒常に湿気が抜けず、床の湿気や柱のカビは避け切れない。これが、縄文時代のように日常的にそこに住み、火を焚くという環境であれば、内側からの湿気はある程度解決されるものと考えられるが、温暖多湿な日本の気候下では

外からの湿気はある程度慢性化していたことも考えられる。したがって、床面の水分を除去し、完全に踏み固められるようになるまでには相当の時間を要することが予測される。

また、竪穴掘削によって生じた土の処理の問題もある。これまでの発掘調査での知見などから屋根裾に盛り上げることは承知していたが昨年度も今年度も住居周辺に配土した。

直径5m、深さ50cmの竪穴の場合、
 $\pi \times (2.5)^2 \times 0.5 = 9.8125\text{m}^3$
 の土が排出されることになるが、この点については日本大学生産工学部教授山口廣氏から詳細なご教示をいただいた。

また、土器の作成を陶芸サークルに依頼した。土器は作成する住居の時代性に合わせ、それぞれの時代の土器を作ることとし、縄文早期が大楽毛式、縄文中期が北筒II式、統縄文期が後北C1式、擦文期が擦文式とした。これらはこれから順次作製の予定である。（浦幌町郷土博物館学芸員）

引用文献

後藤秀彦 (1992)「浦幌口マンの会の竪穴復元」
 『浦幌町郷土博物館報告』39 浦幌

1992年10月20日	印刷
1992年10月30日	発行
編集	後藤秀彦
発行責任者	石川安次
発行所	浦幌町郷土博物館 (089-56) 北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地の1
印刷所	大同出版紙業株式会社 (080) 北海道帯広市西7条南6丁目